

ノンフィクション劇場

小柳順子作 飯島勅脚色 「わたしの青春グラフィティー」

<前編>「ジャズが命」

(音楽) (激しいジャズ音楽)

リーダー(女) さあ、今日はここまでね。明日はまた放課後 3 時に教室に集合よ。みんな、自分のパートをしっかりマスターしておいてよ。学園祭のステージが目の前なんだからね。

ジャズ研男子 オーケー。それじゃあと、みんな、例のところへ行くとするか。練習の後の一杯はこたえられないからなあ。久美子、お前、モチ行くよな？

田中久美子 当たり前よ。あたしはこれが楽しみでジャズ研に来ているんだから。

(全員) (笑い声)

久美子ナレーション あたし、田中久美子。今、青春高校 2 年生。大学受験の準備は、とっくに始めているんだけど、2 年近くやっているジャズ研のクラブ活動はずうっと続けているの。あたしはウッドベースを弾いているんだけど。そう、あたしからジャズを取ってしまったら、生きていけないかもね。あたしにとって、ジャズを演奏している時だけが、生きてるって感じられるんだ。それに、ジャズ研のみんなと練習のあと飲みに行くのがまた、最高の楽しみなの。1 年生の時から、あたし、お酒とタバコを覚えたの。お酒は、いろいろイヤなこと、みんな忘れさせてくれるしね。

(効果音) (玄関の開く音)

久美子 (酔って)ただいま！ 遅くなりまして、すいませ〜〜ん！

母 久美子。あんたったら、今日もそんなに酔っ払って。ジャズ研の人たちと飲んでいたのね。全く情けないわ。これが高校生の姿かしら。ジャズ研はやめてしまいなさいって、あれほど言ってるでしょ。

久美子 (酔って)うるさいわね。お母さんなんか、あたしの悩みは分からないのよ。ジャズ研やめるくらいなら、あたし死んじゃう！ お休みなさ〜〜い。

母モノローグ ああ、情けない。こんな子に育てたつもりはなかったのに。あれで大学受験はどうなるんだろう。

(音楽) (久美子の部屋。ジャズ音楽)

久美子モノローグ あ〜あ、なんのために高校生やってるのかなあ。中学生の時は、高校受験、高校受験と言って一生懸命勉強した。おかげで一流の大学受験校に入学できた。その時の両親の喜びようと言ったら、それは大変なものだった。そして今、また同じことをあたしに期待してるのよね。学校に行けば、授業はすべて受験、受験、受験。そして家に帰れば両親からも受験、受験、受験。みんな、本当に

どうかしてる。世の中、狂ってるよ。そんなに勉強して、いい大学に入って、それでどうするの？ あたしの 17 歳は、一生に一度しかないのに。あたしは、この高校生時代を、もっと大切に、思う存分、自分をぶつけて生きたいのよ。この若さはなんのため？ 受験勉強でくすぶって過ごすため？ 違う！ やっぱりあたしにはジャズしかない。ジャズが、今のあたしの命よ！

ナレーション

そうして 2 年生も終わろうとするころ、あたしは少し前から付き合っていたジャズ研のメンバー、孝と、ささいなことから別れた。言ってみれば、体よくフラれたのだ。新しく入ってきた後輩の女の子にくら替えたらしい。悔しかった。その日の練習のあと、あたしはジャズ研の先輩の山田さんと、いつものところに飲みに行った。あおるようにグラスを重ねて、いつしかあたしはへべレケになっていた。

(効果音)

(酒場のガヤ)

山田

久美子、大丈夫かよ？ いつもの君らしくないなあ。そんなに飲んでさあ。何かあったのか？

久美子

(酔って)ほっといてよ！ あたし、もうどうなってもいいんだから。(山田のほうにもたれかかる。)

山田

おっとつと。久美子、しっかりしろよ。ほら、ちゃんと体起こして。しょうがないなあ。よう、みんな！ おれ、久美子を家まで送っていくからよ。先に帰るぜ。じゃあな。

(効果音)

(夜の街の雑踏)

山田

久美子、ほら見てみろよ。街のネオンサインがきれいだけ。酔い覚ましに少し歩こうか。

久美子

山田先輩、聞いてくれる？ あたしね、あたし、孝にフラれたの。失恋よ、失恋。いい線まで行っていたのにね。寂しいと言うか、悔しいと言うか、あたし、こんな気持ち、初めて。

山田

そうだったのか。それであんなに荒れてたんだ。ま、くよくよするなよ。久美子みたいなやつを、ほかの男どもがほっとくわけないって。さあ、今日は僕が家まで送って行ってあげるよ。

久美子

山田先輩って、優しいのね。

ナレーション

そんな訳で、あたしは、2 年生の終わりのころから、同じジャズ研の山田先輩と付き合い始めた。3 年生の山田先輩は、後輩のあたしにいろいろと親切にしてくれたし、先輩とは、かなりの線まで行ってしまった。

ところが、3 年生になったばかりのある日のこと、あたしは、新宿の街で買い物をしている時、偶然に、山田先輩が同じジャズ研の、それもあたしと仲のいい恵子と、腕を組んで歩いているのを見てしまった。ショックだった。全身の力が抜けたみたいで、どうやって家に帰ったのか分からないほどだった。もちろん、

もう恵子のいるジャズ研に顔を出すことはできなくなり、山田先輩との仲もそれっきりだった。ダブルパンチ。そう、あれほど好きだったジャズ研。高校時代の生きるすべてだったジャズ研を、あたしは、“今度こそ”と思った先輩への愛とともに、失ってしまったのだ。通学の満員電車で揺られながらも、ポーっとした毎日が続いた。

(効果音)

(バックに電車の車内の音)

ナレーション そんな5月のある日のこと――。

(効果音)

(電車の車内の音)

久美子モノローグ あ、あんなところに十字架の塔が見える。教会があるのかな。教会って、どういふところだろう。どんな人たちが集っているんだろう。あたしも教会に行ってみたい。そして聖書読んでみたい……。

ナレーション

あたしの心は餓え渴いていた。翌日のクラスで――。

(効果音)

(教室のガヤ)

久美子 それやこれやで、あたし今、すごくつらいの。でね、ふと思いついて、聖書を読んでみようと考えたわけ。キリスト教の聖書よ。

女子

聖書？ やめといたほうがいいんじゃない？ あれは単なる歴史文学でしょ？ あんたの今の苦しみがどんなものなのか、あたしにはよく分からないけどさ、あんなイスラエルの歴史の本に、人を助けることなんか、できないんじゃない？

ナレーション

「聖書は単なる歴史文学よ」と言うこの時のクラスメートの言葉が、妙に印象深く心に残ってしまい、結局あたしは、聖書を手にはすることはなかった。倫社の授業時間に、イエス・キリストの名前は出てきたけど、単なる聖人の一人だったし、孔子とか仏教に関する書物も何冊か読んでみたけど、あたしの傷つき、目標を失った心はいえなかった。何かに餓え渴きながら、どこに、何を求めればいいのかも分からぬまま、あたしはむなしく日々を過ごした。気がついたら、受験の日は目の前に迫っていた。

(音楽)

(不安と焦りのモチーフ)

ナレーション

結局、あたしは大学受験に失敗し、晴れて(?)天下の浪人生となった。予備校に通ってはいたが、酒とタバコがよりどころの、荒れた浪人生活だった。でも満たされぬ何かを求めて、むさぼるように書物を読みふけたのもこの時だった。ツルゲーネフの「初恋」とか、ドストエフスキーの「罪と罰」に、大きな感銘を受けた。そんなあたしだったが、翌年の受験では、どうしたことから、小さいころからあこがれていたロシア文学が先行できる、外国語大学に入学できた。ところが、入学式の日の上野公園から、あたしは大きなドジをしでかしたのだ。それは、ロシア科の新入生歓迎コンパの席上でのことだった。

(効果音)

(酒場のガヤ)

久美子 (かなり酔って)何よ、ロシア科のコンパって、ケチってるわね。もっとお酒ちょうだいよ。お酒！ お酒よ～～！

先輩 田中君、いい加減にしないで！ ロシア科を甘く見てはいけないよ。さあ、外へ出て、少し夜風に吹かれてきなさい。入学式の日にかうじゃ、先が思いやられるよ、全く。

ナレーション あたしは、首根っこをつかまれるように、外へ引っ張り出された。周りのみんなはワイワイ面白がって見ていたが、もうろうとした視線の中で、そんなあたしを笑いもせずじーっと見つめている一人の男性がいるのに、あたしは気がついた――。

<後編>「出会いの賛歌」

ナレーション 大学のロシア科に入学した当日、新入生歓迎コンパで、あたしはへべレケに酔って醜態を披露し、先輩にこっぴどくしかられてしまった。でもその時、その様子をずうっと見ていて、あたしに熱い視線を投げかけている、同じロシア科の男性がいるのに気がついた。

それから2か月たった6月、大学のボート大会、ナックルフォーが開催された。その前日のこと、歓迎コンパであたしに熱い視線を投げかけていた彼が、あたしのところにやってきた。

中川肇 あの一、田中さん、明日、おれのためにお弁当を作ってきてくれない？

久美子 え？

ナレーション あたしは、一瞬あっけにとられた。初めての会話にしては、かなりススんでいたからだ。だが、“なんて強引な”という思いとは裏腹に、あたしは思わず「はい」と答えていた。こうして、彼、中川肇君との付き合いが始まった。

久美子 あ～あ、また彼と一緒にいて、帰るのが遅くなっちゃったわ。でもいいのよ。だってあたし、彼のこと好きだし、彼と一緒にいたいんだもの。

(効果音) (玄関を開ける音)

久美子 ただいま。

母 久美子。今何時だと思ってるの？ 今日はバイトの日じゃないでしょ？ 一体何やってるのよ！

久美子 友達のノートをコピーしてて…。

母 コピーにそんなに時間がかかるわけじゃないでしょ。家のことをなんにもしないで、遊んでばかり。本当に久美子は役立たずなんだから。

久美子モノローグ わたしが役立たず？…でもいい。なんて言われても、彼されいてくれたら…。

ナレーション ところが、それから半年もしないうちに、わたしたちの間は微妙に変わっていた。互いのわがままが、ストレートのぶつかりだしたのだ。

(効果音) (駅の構内)

久美子 あ、ごめんごめん。遅れちゃって。電車一本乗り遅れちゃったの。

肇 お前、早くしろよ。遅れてくんなよな。

久美子 そんなこと言ったってしょうがないでしょ。だから謝ってんじゃない。

肇 何言ってるんだよ。今日の授業、おれにとっちゃ大事なの分かってんだろ。それを15分もイライラ待たしといて、「ごめん」の一言で済むのかよ。お前のそういうところがムカつくんだよ。

(効果音) (沈黙したまま足音だけ)

久美子 ちょっと。早く歩かないで。昨日足を痛めて早く歩けないの。

肇 しょうがないな。でも早く歩く努力くらいしろよな。目一杯大またに歩くとかさ。ところで、今日の授業、予習したか？

久美子 それが…。昨日帰るのが遅かったでしょ。それに、読みかけの本、どうしても読んじやいたかったし。

肇 そんなの言い訳にならないよ。おれは帰ってからちゃんとやったよ。あとでまた泣きついたって知らないからな。

久美子 ひどい、肇君…。

モノローグ どうしてかしら。前はもっと優しい人だったし、何でも話せたのに…。あたしのこと嫌いになってきたのかしら。彼にとって、一体あたしってなんなのかしら…。

久美子 ねえ、あたしのこと、どう思ってる？ 好き？ 嫌い？

肇 なんだよ今更。言わなくたって分かるだろ？

久美子 だったらもっと優しくしてくれたっていいじゃない！

肇 だった優しくされるような態度とれよな！

久美子 何よ、肇のバカ！

モノローグ あ～あ、なんでこんなこと言ってしまったんだろう。彼のことが好きなのに…。でも、彼だってあたしに優しくすべきだわ。「ありのまんまでいい」なんてカッコいいこと言って、強引にあたしの中に入り込んできたの、あっちなんだから。

ナレーション その日の夕方、女の子だけの飲み会でのことだった。

さやか あんたたちはいいわね。仲むつまじくて。うまくいってるんでしょ？

久美子 ん、まあ…。理恵たちは？

理恵 この間、ドライブに行ったの。真夜中に海まで行ってね。そこでね、彼ったら…(フフッと笑う)とにかく、とてもよかったわあ。

久美子 そう。いいわねえ。

さやか ところでさあ、水野君って彼女いるらしいよ。あんなやつと付き合う女の子って、物好きだと思わない？

久美子 ほんとね。あんな女たらしのどこがいいのかしらね。

モノローグ 人の悪口を言っちゃいけないと思ってて、また言ってしまった。友達には心を開けないし、家では“役立たず”って言われるし…。あたしって本当に役立たず

なのかしら？ 彼がいても独りぼっち。人の悪口は言っちゃうし、ウソもつくし、あたしが言いたくないって思ってることを言ってしまうてるのよね。どうしてかしら？ あたしってどういう人間なのかしら？ 分からない。分からない。仕方ないから本でも読んでみよう。何か分かるかもしれない…。

ナレーション

あたしはその夜、一人自分の部屋で、トルストイの「復活」を読んでいた。

「…彼はその晩、まんじりとしなかつた。そして、聖書を読む人はよく経験することだが、聖書を読みながら、これまで何度読んでも気づかずにいた言葉の意味を、初めて理解したのであった。…ネフリュードフは考えた。“我々は、自分の生活の主人は自分自身なのだとか、この人生は我々の享樂のために与えられているのだとか、愚にもつかない確信を抱いて生きているんだからな。そんなことは明らかにバカげているではないか。いや、我々がここへ送られてきた以上、それはだれかの意志であり、何かの目的があつてのことではないか。…”神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、その他のものはひとりで与えられるであろう。ところが我々は、その他のものばかりを求めているから、それを見いだすことができないのも無理はない。」

——“神の国と神の義を求めなさい”かぁ。どうということかなあ。本当に、それを求めれば、与えられるんだろうか？ 選書も読んでみようかな。そうだ、この間、大学で無料配布していた時にもらった新約聖書がある。

(効果音)

(聖書をパラパラめくる音)

ナレーション

あたしは生まれて初めて聖書を開いて読み始めた。

モノローグ

「アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。」何これ？ 片仮名の名前ばかり。えーい、飛ばしちゃえ。「イエス・キリストの誕生の次第はこうであつた。」ああ、クリスマスのお話ね。

(効果音)

(また聖書をめくる)

モノローグ

「悔い改めにふさわしい実を結べ。」“悔い改め”って？ まあいいや。「もし誰かがあなたの右のほおを打つなら、ほかのほおも…。」あ、これ知ってる！「敵を愛し」ですって？ そんなこと無理よ。「自分を愛するものを愛したからといって、なんの報いがあるか。」あたしは、大好きな彼だって十分に愛せないわ。あたしって、なんて不完全なんだろう。役立たず。ダメなやつ。ウソはつく。悪口は言う。…不思議だ。ここに書いてあること、みんなあたしに言ってるみたい。「赦ゆるしなさい。」あたしは人を赦せない。イエス・キリストのように人は人を赦せないわ。あ～あ、イエス・キリストのような人になれたら、どんなにいいだろう。

ナレーション

あたしは、何か矢も盾もたまらなくなって、クラスメートの井原夏子に電話した。彼女はクリスチャンだった。

久美子

ねえ、夏子。“罪”って何？ 聖書に書いてあつたけれど。

夏子

(フィルター音) 神様に背を向けて、自分勝手なことをしてるってこと。罪を罪だ

と思わないこと自体が罪だと、聖書のどっかに書いてあったわよ。

久美子

それから、っと。…ああ、たくさんあるなあ。電話、長くなってごめんね。

夏子

(フィルター音)いいわよ。ね、どうせなら、明日、教会に来ない？ 何か用ある？

久美子

別にないけど。…そうね、行ってみようかな。

モノローグ

教会か…。生まれて初めて行くんだわ。どんなところかしら。ちょっと不安。

ナレーション

その時あたしはふと、高校生の時、失恋し、ジャズ研をやめたあの苦しきの仲で、電車の窓から見た、十字架の付いた教会を思い出した。

(音楽)

(教会の賛美歌)

カレン

田中さん、どうでした、礼拝は？

久美子

うーん、面白かったです。お話はよく分からなかったけど。

カレン

この「四つの法則」というブックレット、読んだことありますか？

久美子

いいえ。

カレン

じゃあ、一緒に読んでみましょうか。

夏子

オーケー、カレン。

カレン

第1はね、「神はあなたを愛しておられます。」

久美子モノローグ

あたしを愛してる？ 神様が？ このあたしを？

カレン

第2、「でも人は罪を犯して神から離れてしまったので、神の愛と計画とを、知ることも体験することもできないのです。」

ナレーション

こうして、夏子の友達のカレンさんは、神の救いの四つの法則を話してくれた。罪ある人間のために、神の一人子イエス・キリストが、十字架の上で身代わりに死んでくださったこと。それを信じる者は救われ、永遠の命を与えられること…。

久美子モノローグ

確かにあたしには罪がある。人の悪口は言う。ウソはつく。それよりも何よりも、あたしは神様に背を向けていた。この罪のために、イエス・キリストが十字架にかかったの？ あたしを愛しているから？ 本当だろうか？ でも、聖書にウソが書いてあるとは思えない。そうね、もう潮時だわ。迷っている場合じゃない。信じてみよう。イエス様にあたしの人生を任せてみよう。主イエス様、あたしはあなたを必要としています。あたしの心の中に入って、あたしを支配してください。あたしを、あなたが望んでおられるような者に変えてください。アーメン。

ナレーション

翌日の朝、あたしの目には、日の光も、庭の草木も、すべてが輝いて見えた。このすがすがしさ。なんとも言えない心の平安。わき出てくるような喜び——。あたしは生まれ変わったのだ。

(音楽)

(明るい、喜びに満ちたブリッジ)

ナレーション

それから数日後のことだった。

持って、充実した日々を送っている。

<完>